

CONTENTS

現場に役立つ日本語教育研究 6 目次

まえがき 岩田一成 iii

第一部 語彙指導を支える知恵と工夫

- 第1章 話題による日本語教育の見取り図(山内博之) 3
- 第2章 スタンダードを利用した
タスク・ベースの言語指導 (TBLT) (小口悠紀子) 17
- 第3章 語彙習得を促す「話題別読解」の提案(橋本直幸) 31
- 第4章 類義語分析のためのチェックリスト(建石始) 45
- 第5章 語彙に着目した
日本語教科書作成プロセスの歩み(田中祐輔) 59

第二部 教材案 I : コース単位で利用できるアイデア

- 第6章 初級語彙の学習負担を減らす工夫と教材化(岩田一成) . 77
- 第7章 スタンダードを利用した語彙の教材化(山内博之) 91
- 第8章 初級漢字語の教材化(本多由美子) 105
- 第9章 読むことを通じてことばの力を伸ばす
語彙学習支援ツールと教材化(柳田直美) 121
- 第10章 現場指導 (OJT) における
看護師養成と教材化(嶋ちはる) 135

第三部 教材案Ⅱ：授業単位で利用できるアイデア

第11章	コロケーションリストの教材化(中俣尚己).....	153
第12章	国語科教育のためのオノマトペの教材化(中石ゆうこ)	167
第13章	感動詞の教材化(小西円).....	183
第14章	言語テスト作りを応用した 形容詞の教材化(渡部倫子).....	199
第15章	多義語の教材化(麻生迪子).....	215
第16章	語彙習得研究の成果を踏まえた 震災関連語彙の教材化(小口悠紀子・畑佐由紀子).....	233
あとがき 山内博之		247
執筆者紹介		253

まえがき

岩田一成

1. はじめに

唐突ではあるが、中国のレストランで注文した料理がどうしても食べきれない状況(かつ、もったいないから置いて帰りたいとき)を想定していただきたい。一言「打包(ダーバオ)」と言えば、お持ち帰り用のタッパーを用意してくれる。この時、格関係、テンス、アスペクト、ボイスなどという文法カテゴリーは知らなくてもかまわないのである。コミュニケーション場面において、単語が一つ言えることで意図が相手に伝わるなんてことはよくある。文法の重要性を否定するつもりはないが、語彙の重要性はもっと強調してもいいのではないかと考えている。本書は、「語彙を中心にして教材を作ってみたらどうなるか」という共通課題で取り組んだ論文集である。本書で伝えたいメッセージは、「語彙は文法導入のおまけではない」ということである。

現在、語彙ではなく文法を中心に教材が作られているという背景がある。岩田(2014)では、1990年代後半以降の主要初級教材を対象として採択されている動詞関連の文法項目をカウントし、全体の93%(53項目)は教材間で横並び採択(不採択)を行っていることを明らかにしている。この採択初級文法は太平洋戦争中にシラバスが作られて以来ほとんど変わっていないことも明らかになっている(岩田2015)。つまり初級文法は、ここ70年間変わ

ることなく規範を守って初級教材に採択されてきているのである。初級総合教材に上級文法が紛れ込むなどということは絶対にありえない。

一方、語彙は教材間で全く一致していない。戦後の初級総合教材 21 種 34 冊を分析した田中 (2016) は 8,306 項目の語彙を抽出して分析を行っており、結果は以下のとおりである。

初級教材の語彙調査 8,306 項目 (田中 2016)

全教材で一致して使っている語彙	138	全体の 1.7%
半数以上の教材が採用している語彙	875	1 割程度
1 種類の教材にしか出現しない語彙	4,300	全体の半数以上

1990 年以降の主要初級教材 8 種に絞ってみても、語彙の全体一致は 9.6% しかないことがわかっている (今西・神崎 2008)。それら 8 種の初級教材には旧日本語能力試験の 4 級語彙が 705 語採用されているが、全体一致は 314 語しかないことも同じ論文で指摘されている。初級教材は初級語彙を意識しているわけではないことがわかる。また、初級で一番普及している『みんなの日本語 (第 2 版)』には「網棚、暗証番号、受付、駅員、置き場」といった旧日本語能力試験の級外語彙の他、1 級・2 級語彙がたくさん入っており、初級教材には中上級語彙が入っていることもわかる。このように、語彙に関しては各教材がそれぞれの判断で独自に選んでいることになる (本書第 5 章の田中論文も参照)。

本シリーズ 1 巻の庵・山内 (編) (2015) で文法シラバスを見直す議論から始めて、本書は将来のあるべき姿「語彙重視の日本語教育」を提案する形でシリーズを締めくくることになる。本シリーズの 2 巻である森 (編) (2016) でニーズ別の語彙リストが公開され、山内 (編) (2013) 『実践日本語教育スタンダード』(以後「スタンダード」と呼ぶ) では膨大な語彙が話題別・タスク別に整理され、語彙中心の教材を議論・作成する環境は整いつつある。今、まさに語彙と教材の議論をする時期が到来しているのである。本書が、「語彙重視の日本語教育」を現場のみならずと共有するきっかけになれば、幸いである。

2. 本書の構成

本書には以下の16本の論文が掲載されている。以下、この順で各論文について簡単に解説していく。

第一部 語彙指導を支える知恵と工夫

- 第1章 話題による日本語教育の見取り図 (山内博之)
- 第2章 スタンダードを利用したタスク・ベースの言語指導 (TBLT)
(小口悠紀子)
- 第3章 語彙習得を促す「話題別読解」の提案 (橋本直幸)
- 第4章 類義語分析のためのチェックリスト (建石始)
- 第5章 語彙に着目した日本語教科書作成プロセスの歩み (田中祐輔)

第二部 教材案Ⅰ：コース単位で利用できるアイデア

- 第6章 初級語彙の学習負担を減らす工夫と教材化 (岩田一成)
- 第7章 スタンダードを利用した語彙の教材化 (山内博之)
- 第8章 初級漢字語の教材化 (本多由美子)
- 第9章 読むことを通じてことばの力を伸ばす語彙学習支援ツールと教材化 (柳田直美)
- 第10章 現場指導 (OJT) における看護師養成と教材化 (嶋ちはる)

第三部 教材案Ⅱ：授業単位で利用できるアイデア

- 第11章 コロケーションリストの教材化 (中俣尚己)
- 第12章 国語科教育のためのオノマトペの教材化 (中石ゆうこ)
- 第13章 感動詞の教材化 (小西円)
- 第14章 言語テスト作りを応用した形容詞の教材化 (渡部倫子)
- 第15章 多義語の教材化 (麻生迪子)
- 第16章 語彙習得研究の成果を踏まえた震災関連語彙の教材化
(小口悠紀子・畑佐由紀子)

*第二部・第三部の各論文で作成されている教材例は、くろしお出版のウェブサイト (<http://www.9640.jp/genba/>) でダウンロードできる。

3. 各章の紹介

第1章 話題による日本語教育の見取り図(山内博之)

この論文は、100の話題を難易度順に並べることで、初級から上級までのロードマップが描けるといふ壮大な提案をしている。この前段階の作業として‘スタンダード’で5,495の名詞に「具体度」「親密度・必要度」という基準でラベルを貼って100の話題に振り分けている。それぞれの話題が抱える名詞の「具体度」「親密度・必要度」を点数化することで難易度順を設定している。より具体的で親密度や必要度が高い名詞を多く抱える話題は初級から利用できるという発想である。こういった話題中心の大きな見取り図を示しつつ、初級では文法に重点を置き、中級ではタスクに重点を置く形で全体像を進めることを提案している。論文では初級における具体的な教授項目にまで踏み込んでその組み立て方が例示されている。

第2章 スタンダードを利用したタスク・ベースの言語指導(TBLT)

(小口悠紀子)

この論文は、タスク・ベースの言語指導(TBLT)に注目して語彙の教育を考えようとするものである。タスク・ベースの言語指導におけるタスクの定義は、授業の序盤で習った文型を使用するための活動とは明確に区別される。それは意味に焦点を当てた真正性の高いやりとりであり、タスクの遂行には語彙の重要性が明らかである。タスクジェネレーターを紹介することでタスクの設定方法を理論的に論じる一方、中級教材の具体例を提案することで具体的な実践への提案も行っている。第1章で示された話題の難易度を利用している点、中級レベルをタスクで行おうと提案している点において、第1章の山内論文の延長線上にある。

第3章 語彙習得を促す「話題別読解」の提案(橋本直幸)

この論文は、語彙の習得を促進するために「話題別読解」という活動を提案しようとしている。「話題別読解」とは、共通の話題(topic)の読み物をまとめて読むものである。この提案を教室内で具体的に応用できるように、既存教材の膨大なデータに、話題という横車を刺していくつかの 카테고리

にまとめようとしている。例えば、既存教材（初級～上級）120 から、「食」に分類された読み物が124あり、それらをまとめて読んでいくことで様々なメリットがあることを紹介している。既存の教材を利用することで各教育現場での実践が容易になっている。一方、「食(124)」「言葉(173)」のような教科書で取り上げられやすい話題と「税(6)」「株(3)」「選挙(2)」「芸能界(1)」のような取り上げられない話題があることも明らかになっている。既存教材だけでバランスの良い読解を行うには限界もある。

第4章 類義語分析のためのチェックリスト（建石始）

この論文は、日本語教師や中上級の日本語学習者が類義語の分析するためのチェックリストを提示している。日本語教育で語彙の問題を考えるに当たり避けては通れないのが類義語であると言える。「XとYはどう違うのですか?」という質問は定番で、X・Yには「うまい・おいしい、近づく・近寄る」など様々なものが入りうる。一つ一つ類義語辞書をひいて考えるのも重要ではあるが、この論文ではそれらを考えるためのヒントをわかりやすく提示することで、自分で考える力を育むことを目指している。具体的には、「うまい・おいしい」の違いは使用する人物が男か女かで異なり、「近づく・近寄る」の違いは有生・無生の違いが関わっている。

第5章 語彙に着目した日本語教科書作成プロセスの歩み（田中祐輔）

この論文は、教科書作成プロセスを語彙的側面から明らかにしたもので、作成者へのインタビューを用いた点が際立って新しい手法である。その結果、教科書作成において先行教科書は文型を中心に参照されているということである。語彙の選定については、会話、場面、トピック、学習者の属性など、様々な観点が各教科書作成者によって設定され、教科書毎に独自性のある語が掲載されていることが明らかとなった。現在確認されているだけでも2000以上の教材がある中で、適切な教材選びは日本語教師の能力の一つであるという指摘を引用しつつ、教科書を研究する意義を説いている。教科書を分析する研究分野がこれから活性化するのはないだろうか。

第6章 初級語彙の学習負担を減らす工夫と教材化 (岩田一成)

この論文は、学習負担を減らして初級語彙を提示する方法について論じている。初級語彙を、活用のない語彙(指示詞、人に関する言葉、数詞関連語彙、時間語彙、疑問詞、副詞・接続詞)と活用のある語彙(動詞、形容詞)に分けて論じている。活用のない語彙については一覧表にして学習者が常に見られるようにすること、活用のある語彙の動詞については50程度に数を絞って提示することを提案している。初級教育は普通形を導入するあたりから活用規則が複雑になるにもかかわらず、その期間に新出動詞も増える(『みんなの日本語』を例にとる)ため、結果として初級で365の動詞が提示されている。一覧表の提示や新出動詞の数を減らすことで学習負担を減らせるようになると主張している。

第7章 スタンダードを利用した語彙の教材化 (山内博之)

この論文は、第1部第1章の山内論文において提案された教授項目の全体像を踏まえ、教材として落とし込む方法を提示している。具体的な初級教材の在り方を論じている論文である。最初に名詞の重要性を強調した上で、名詞を学習者に提示するために動詞をうまく利用することが提案されている。背景として品詞全体の分布を見渡す大きな議論がなされており、実質語 vs 機能語という対立軸をもっと連続的に捉えると名詞は実質語の典型であり動詞は機能語に近いという発想にたどり着く。名詞語彙の教材化を考えると、この発想が非常に重要な出発点となる。この論文は、‘スタンダード’を利用している点で第2章の小口論文とつながり、初級語彙の名詞語彙を扱う点で、第6章の岩田論文と相補関係にある。

第8章 初級漢字語の教材化 (本多由美子)

この論文は、非漢字圏の学習者が漢字語を効果的に学ぶための方法を論じている。岩田論文でも触れているが、非漢字圏の学習者の割合が高まっている現在、漢字語の指導を効果的に行うことは喫緊の課題である。この論文では、「近所」のように「近い」「ところ」という各意味要素の集合として理解できる漢字語と「世話」のように意味要素の集合では理解できない語がある

という点に注目している。先行研究で前者の割合が非常に高いと指摘されていることを踏まえ、後者について「意味の結びつきがない」と強調したうえで、ほとんどの漢字語は意味要素から合成できることを指導すればいいという提案を行っている。具体例として初級漢字語リストの全体像も公開しており、15のまとまりに分けて順に指導できることを示している。

第9章 読むことを通じてことばの力を伸ばす語彙学習支援ツールと教材化(柳田直美)

この論文は、読書において学習者の自律学習をサポートするしくみについて論じている。学習者が自分の興味に合わせて読み物を選ぶこと、その読書活動を自分自身で管理しながら進めていくこと、こういった教育活動を提案している。この背景にあるのは、教師が提供する読み物ばかりでは学習者の「読むことを楽しむ気持ち」を喚起することは難しいという視点である。橋本論文でも指摘しているように、既存教材は話題に偏りがありバランスが悪い。結果として同じような話ばかり学習者に読ませることになる。提案する教育活動では、中級学習者が自分で選んだ本を読み進め学習者個別のことばの力を伸ばすことを目指している。

第10章 現場指導(OJT)における看護師養成と教材化(嶋ちはる)

この論文は、看護現場で必要となるコミュニケーション場面を取り上げ、外国人の看護師養成について論じるものである。コミュニケーションの中でも「申し送り」場面を取り上げている。これまで国家試験対策に注目が集まってきた点を踏まえて、国家試験合格後の現場での教育を対象としている。また、日本語教師による教室支援ではなく、看護師による現場指導(OJT)を想定している点が大きな特徴である。看護現場には「空床、受診、夜勤、痰、オキシメーター」といった専門語彙がたくさんある。先行研究ですでに提示されているこれらの語彙を、現場指導で用いる学習活動案として具体的に提案している。

第11章 コロケーションリストの教材化 (中俣尚己)

この論文は、コロケーションクイズという活動によりコロケーションを利用した語彙の習得について論じるものである。「ひく」という動詞の意味が分かって、「辞書を」「目を」という共起名詞が使いこなせないことには、語の使い方を学習したとは言えない。こういった語と語の共起関係(コロケーション)の重要性を指摘している。コロケーションを教材化する際、語と語を結びつけるマッチング練習などが行われることもあるが、この論文では共起する中心語を隠してしまう教材を提案している。具体的に言うと、「ひく」という動詞は提示せずに隠しておいて、「辞書を」「目を」という名詞をたくさん提示して、「ひく」を当てさせる活動である。隠してある場所に何が入るのかを学習者が考えることにより、楽しく活動ができて理解できる語彙が広がっていく。

第12章 国語科教育のためのオノマトペの教材化 (中石ゆうこ)

この論文は、オノマトペの効果的な習得について論じるものである。具体的にはオノマトペ合わせカードを開発している。このカード教材は、中俣論文と同様コロケーションを利用したもので、例えば「ギラギラ」と「光る太陽」というセットで用いられるペアを利用するものである。国語科と言う科目は、小学校就学前に培った基礎的な日本語能力を前提として「日本語を学ぶ」教科であるとされている。そういう意味では家庭で日本語を用いていない外国につながる子どもたちにとっては大変不利な状況にある。また、オノマトペの習得・指導が難しいことはすでに指摘されていることであり、子どもたちがとっつきやすいカード教材を提案することは有効であると言える。

第13章 感動詞の教材化 (小西円)

この論文は、コーパスや教材の分析を通じて指導項目としての感動詞を抽出しようとするものである。感動詞の中でも、「わっ」「へえ」「あれ?」のような感情感動詞、「ええと」「あの」などの言いよどみを表すフィルターを主な対象としている。感動詞は正確に使うことで様々なメッセージを相手に伝えることができる。しかし文型中心の現状では、感動詞の指導は会話文にて

てくるおまけの扱いであり、メインの指導項目にはなっていない。こういった背景からこの論文では、指導すべき感動詞一覧を作成し、その教材例を提示している。どの段階で指導すべきかは議論が分かれるところであるが、こういった意識的な感動詞の指導を求めている学習者がいることは間違いないのであろう。

第14章 言語テスト作りを応用した形容詞の教材化 (渡部倫子)

この論文は、言語テスト作りの方法を応用することでよりよい語彙教材を作ることができるということを主張する。形容詞を例に、妥当性、真正性、実用性、信頼性、波及効果といった評価の概念が、教材化にどのように関わってくるのかを論じている。具体的な教育実践の方法は、市販のカードゲームを使ったものであり、応用可能性が非常に高い。形容詞は、具体的な場面があってはじめて導入が可能な語彙であり、その場面設定が非常に重要である。この論文では、カードゲームを上手に利用することで形容詞の使用場面を提示している。

第15章 多義語の教材化 (麻生迪子)

この論文は、学習者が自律的に多義語を学習する方法について論じている。動詞の多義語などは、学習者がその多義性に気づいていないと文脈に合わせて正しく意味を理解することができない。多義語は高頻度出現語であることはすでに指摘されていることだが、一方、学習者が上級になっても多義動詞の習得が不安定であることも指摘されている。この論文では、中俣論文、中石論文同様、コロケーションを利用して学習者の気づきを促そうとしている。論文のテーマは多義語なので、動詞を固定して、共起する名詞をたくさん選択肢の中から分類させるという活動を提案している。この活動によって学習者は頭の中に語彙のカテゴリーを形成できるようになる。

第16章 語彙習得研究の成果を踏まえた震災関連語彙の教材化

(小口悠紀子・畑佐由紀子)

この論文は、習得研究の知見を活かして教材を作ってみるとどうなるかと

いう設定で議論している。例として震災関連語彙を扱って教材化を試みている。付随的語彙学習の可能性を論じつつ、文章における既知語彙の割合などの研究成果も紹介している。理論を実践に移すべく、「よみもの」と「資料」からなる教材案を提示している。これらに震災場面で遭遇しうる語彙を意図的に埋め込み、遭遇回数を増やす工夫をすることで付随的語彙学習につながる可能性がある。現在、語彙シラバスは様々なニーズのものが公開されている。そういったものを使うことで同様の教材が作成できることを最後に触れており、教材作成の広がりが期待できる。

引用文献

- 庵功雄・山内博之(編)(2015)『データに基づく文法シラバス』くろしお出版。
- 今西利之・神崎道太郎(2008)「日本語教育初級教科書提示語彙の数量的考察」『熊本大学留学生センター紀要』11, pp. 1-16.
- 岩田一成(2014)「初級シラバス再考——教材分析とコーパスデータを基に——」第9回国際日本語教育・日本研究シンポジウム大会論文集編集会(編)『日本語教育と日本研究における双方向性アプローチの実践と可能性』pp. 647-656, ココ出版。
- 岩田一成(2015)「日本語教育初級文法シラバスの起源を追う——日本語の初級教材はなぜこんなに重いのか——」『聖心女子大学論叢』126, pp. 85-110.
- 田中祐輔(2016)「初級総合教科書からみた語彙シラバス」森篤嗣(編)『ニーズを踏まえた語彙シラバス』pp. 3-31, くろしお出版。
- 森篤嗣(編)(2016)『ニーズを踏まえた語彙シラバス』くろしお出版。
- 山内博之(編)(2013)『実践日本語教育スタンダード』ひつじ書房。

第一部

語彙指導を支える知恵と工夫

第 1 章

話題による 日本語教育の見取り図

山内博之

1. はじめに

この論文では、山内（編）（2013）と山内（2015）を利用して、次の2つのことを行う。

- （1） 山内（編）（2013）の語彙リストを利用して、山内（編）（2013）で示された100種類的话题に難易度づけを行う。それによって日本語教育の全体像を示す。
- （2） 山内（2015）で示された初級文法シラバスとセットになるような形で、初級の語彙シラバスを示す。そして、そこで扱われる話題の難易度を、（1）の結果と照らし合わせてチェックする。

山内（編）（2013）とは、『実践日本語教育スタンダード』（ひつじ書房）のことである。その第1章では、8,110の実質語が100種類的话题によって分類されているので、その話題分類を利用して話題の難易度づけを行う。また、それによって日本語教育の全体像を示す。

次に、山内（2015）とは、本シリーズの第1巻『データに基づく文法シラバス』に掲載されている筆者の論文のことである。山内（2015）では、初級の文法シラバスを示したが、この論文では、それとセットになる語彙シラバスを示す。そして、そこで扱われる話題の難易度がどの程度であるのか、（1）の結果と照らし合わせることによってチェックを行う。

第2章

スタンダードを利用した タスク・ベースの言語指導 (TBLT)

小口悠紀子

1. はじめに

「ちょっと気になるクラスメイトをご飯に誘う」「スーパーで購入した果物が傷んでいたので返金を依頼する」「目的の駅まで、学割を使用して新幹線の乗車券・指定席券を購入する」など、日本で生活する日本語学習者は日々様々な課題に直面し、言語的・非言語的コミュニケーションを通してそれらを遂行すべく奮闘している。

このような課題を遂行するために必要な能力を身につけることを目指した指導に、タスク・ベースの言語指導 (Task-Based Language Teaching : TBLT) がある。タスクを用いた指導は学習者にコミュニケーションの機会を与えるだけでなく、学習者の注意を言語形式に向け、言語習得を引き起こすことが期待される。また、学習者のニーズに合わせてタスクを設定することで、教室内でより実践的な言語活動を行うことが可能である。しかし一方で、日本語教育におけるタスクの活用や教材開発は、英語教育 (松村 2012、松村 (編) 2017) などと比べ遅れていることが指摘されている (小口 2018)。

タスクの作成は、学習者のニーズにあった話題を設定することから始まる (Willis & Willis 2007)。ある1つの話題を様々な角度から捉え、複数のタスクを作成することで、学習者は多様な言語活動に挑み、認知的スキルの幅を広げることができる。しかし、教師が実際に話題を設定する場合、何を優先

第3章

語彙習得を促す 「話題別読解」の提案

橋本直幸

1. はじめに

語彙(実質語)の学習や教育において重要な観点の一つに、「話題」がある。語彙とは、「あるまとまりをもった語の群れ」(田中 1978)である。言語教育においては、レベル別の語のまとまり、品詞別の語のまとまりなど、その目的によって様々な「まとまり」を想定しうるが、言語を学習するそもその目的に立ち返れば、やはり「話題」というまとまりは最も重要なものの一つだと考えられる。それは、言語を学ぶ目的が、言語形式を学ぶことではなく、言語活動を達成することにあるからに他ならない。では、「語を話題でまとめる」とはどういうことだろうか。学習者は、ファッションの話がしたければファッションに関する語彙を身に付けておかなければならないし、スポーツの話がしたければスポーツに関する語彙を知っておく必要がある。学習者自身が行おうとする言語活動には、その話題を構成する語のまとまりが必ずあるはずである。このような観点に立ち、山内(編)(2013)では、独自に設定した100の話題に基づいてレベル別のロールプレイリストと構文情報のついた語彙リストを提示している(この語彙リストの作成方法についての詳細は橋本(2016)を参照)。

同じ観点から、この論文では、語彙学習の一つの方法として、話題別の読み物をまとめて読むことで語彙習得を促す「話題別読解」を提案したい。以

第4章

類義語分析のための チェックリスト

建石 始

1. はじめに

この論文では、類義語分析のためのチェックリストを提案する。具体的には、日本語教師や中上級の日本語学習者が自力で類義語の分析ができることを手助けするような教材である。まず、その出発点として、山内 (2013) と砂川 (2014) を取り上げ、類義語に関する両者の主張をまとめる。次に、類義語に関する書籍を取り上げ、どのような内容が示されているかを確認する。さらに、ケーススタディとしてそのうちの1冊を分析し、類義語を分析する際のポイントや手がかりを示す。最後に、それをふまえた類義語分析のためのチェックリストを提示する。

2. 類義語に関する先行研究

ここでは、類義語に関する先行研究として、山内 (2013) と砂川 (2014) を取り上げる。

2.1 山内 (2013)

山内 (2013) はまず、学習者の誤用例には日本語として不適切な表現があり、その表現と本来の正しい表現は必ずしも意味的に似たものではないものの、原理的には必ず類似表現になるという主張を行っている。

第5章

語彙に着目した日本語教科書 作成プロセスの歩み

田中祐輔

1. はじめに

この論文は、初級総合教科書作成者の証言分析と統計調査の二次分析を行うことで、これまで未解決であった初級総合教科書の作成プロセスを語彙的側面から明らかにし、語からはじまる教科書作成のための理論的枠組み構築に資する基礎的資料を提示するために行われるものである。後述するように、日本語教育において教科書は戦後一貫して大きな役割を果たしながら、一方で語に着目した教科書作成はなおざりにされてきた側面を持つ。この論文では、その経緯と要因、今後の教科書作成の展望について具体的に述べる。

2. 問題の所在

2.1 教材開発の活発化と重要性

今日、日本語教材は確認されているだけでも2,261種あるとされ(田中2016a)、教材作成は「戦国時代」(月刊日本語編集部2011)とも称されるほどの活況を呈している。教材とは、効果的に授業を行うための道具であり、指導すべき内容や言語教育観を示し、指導のあり方を左右するものでもある(日本語教育学会(編)2005: 895、丸山2008: 7)。そのため、日本語教師に必要な能力としても、教材の選択と分析、開発が挙げられ、それらの総合的

第二部

教材案Ⅰ：コース単位で利用できるアイデア

第6章

初級語彙の学習負担を減らす工夫と教材化

岩田一成

1. はじめに

この論文では初級語彙の提示方法について考察する。その際、近年の学習者層の広がりやを考慮すると、学習負担の軽減が大きな課題になる。例えば漢語語彙について考えると、非漢字圏の学生が増加している現状では、これまでと同じ授業形態では授業が成立しないことが予想される。独立行政法人日本学生支援機構が調査を始めた平成16年（それ以前は文科省が行っている）では中国（66.3%）と台湾（3.5%）からの留学生を合わせると全体の7割を占めていた。ところが平成26年になると中国（41.2%）・台湾（3.5%）を合わせても45%程度である。ベトナム人、ネパール人留学生の増加を考えると、非漢字圏の学習者が多数派を占めるようになってきている。漢字を理解できる学習者には、これまで漢語記憶のコストをあまり考えなくても授業は進められたが、これからはそうはいかない。

2. 分析データ—KY コーパス—

この論文では初級語彙を、中級までの学習者がよく使っている語彙という意味で用いる。ここで言う中級とはOPI（会話能力テスト）基準である。山内（編）（2013）でも指摘しているが、語彙には具体度や、親密度・必要度といった尺度で測れる違いがあり、‘本’のような学習者にとって具体的で親

第7章

スタンダードを利用した 語彙の教材化

山内博之

1. はじめに

この論文では、次の(1)から(3)の主張に基づき、山内(編)(2013)『実践日本語教育スタンダード』(ひつじ書房)を利用した語彙教材の作成方法を紹介する。

- (1) 名詞を制する者が語彙教育を制する。
- (2) 直接的に名詞を収集しない。動詞を収集し、収集した動詞に名詞を収集させる。
- (3) 動詞は覚えさせるが、名詞を覚えることは強制しない。どの名詞を覚えるかはそれぞれの学習者に任せる。

最初に、**2.**から**4.**において、上記の(1)から(3)までの主張について解説する。次に、**5.**と**6.**において、その考え方に基づいて作成した教材を紹介し、その具体的な作成方法についても述べる。

2. 名詞を制する者が語彙教育を制する

2.では、**1.**の(1)に示した「名詞を制する者が語彙教育を制する。」ということについて説明する。筆者は、山内(2016)において、「名詞を制する者が語彙シラバスを制する」と述べた。**1.**で示した(1)は、その「語彙シラバス」を「語彙教育」に置き換えたものである。

第8章

初級漢字語の教材化

本多由美子

1. はじめに

この論文では非漢字圏学習者を対象にした、初級の漢字を使った初級の語の教材化を考える。漢字は1字ごとに意味を持つ。例えば「春=はる」は漢字1字で語を表す。しかし、漢字は語の一部として用いられるほうが多い。例えば「飲」を見ると、「飲む」のように送りがなをともなって1語になり、「飲食」や「飲み物」、「スポーツ飲料」のように、他の漢字や語との組み合わせによって複数の語を形成する。また、「電」や「員」は常用漢字表に訓読みがなく、「電車」や「会社員」のように常にほかの漢字や語とともに用いられる。漢字を学ぶことは1字ごとの知識をもとに語を学ぶことにつながる。

初級の漢字の授業を担当する先生方から「漢字のテキストを使って授業をしているが、漢字の導入に時間がかかりテキストに掲載されている漢字を使った語の例を十分に扱う余裕がない」という話をよく耳にする。加納(2011)が、漢字学習では漢字の「形(字形)、音(読み)、義(意味)」に加え漢字が語として用いられる際の「用法」も覚える必要があると指摘しているように、漢字学習では扱う情報が多い。授業では限られた時間で多くの漢字を扱うため、他の漢字や語と組み合わせさせて語を形成する「語を形成する『用法』」まで十分に扱えないことがあるのではないかと思われる。また、初

第9章

読むことを通じてことばの力を伸ばす語彙学習支援ツールと教材化

柳田直美

1. はじめに

語彙力とはどのようなものだろうか。全員が知っていたほうがよい語、全員が知っている必要はないが学習者によっては必要な語、学習者個別の興味関心のある分野の語など、さまざまである。これまで、語彙の教育は教室において「全員が知っておいたほうがよい語」を中心に進められてきたのではないだろうか。一方で、「学習者個別の興味関心のある分野の語」の学習については、専門日本語教育の分野で専門の語彙学習についての研究や教材開発が進められてきたものの、学習者の専門学習以外の分野のいわゆる「趣味の語」の学習については個々の学習者の努力に任せられてきた。

従来、読解授業では、初級から中級は教科書や教師が選んだ読み物を中心に進められることが多い。これは、学習者集団（クラス）の日本語レベルに合った生の読み物を見つけるのが困難であったり、学習者の目標（例えば日本語能力試験、大学受験等）に備えるためであり、このこと自体は否定されるものではない。しかし、教師が提供する読み物ばかりでは学習者の「読むことを楽しむ気持ち」を喚起することは難しいというのが筆者の実感である。

近年、学習者の「読むことを楽しむ気持ち」を喚起するため、学習者用の多読教材が充実してきている。多読は「できるだけ沢山読む」、「やさしいものから読んでいく」、「辞書は引かない」、「わからないところは飛ばす（文脈

第 10 章

現場指導 (OJT) における 看護師養成と教材化

嶋ちはる

1. はじめに

近年、経済連携協定（以下、EPA）に基づき来日し、看護師国家試験に合格した EPA 看護師を始め、中国人を中心とした、看護師国家試験受験資格認定を経て国家試験を突破した外国人看護師など、日本で正規の看護師として就労する外国人が増加している。一方で、看護現場における日本語でのコミュニケーションについては、外国人看護師本人、受け入れ施設双方から課題が指摘されている。しかしながら、外国人看護師に対する日本語支援の多くは看護師国家試験の受験対策が主であり、合格後の支援については模索が続いている状態である。そこで、この論文では、国家試験に合格し、看護現場で実際に看護師として勤務しはじめた外国人の支援に向けた教材を考えることを目的とする。看護現場で必要となるコミュニケーション場面の中から、看護従事者間での患者の情報共有を目的に行われる「申し送り」を例として取り上げ、就労現場における研修（以下、OJT）において、現場の看護職員と学ぶことを想定した学習活動案を提案する。

まず、2. で先行研究をもとに、看護の現場で必要となる日本語について論じ、3. で教材化にあたって考慮すべき点について述べる。4. では、看護現場で必要とされるコミュニケーション場面の一つとして申し送りを取り上げ、嶋 (2016) での調査をもとに、申し送りで使用される語彙や表現の特徴

第三部

教材案Ⅱ：授業単位で利用
できるアイデア

第 11 章

コロケーションリストの 教材化

中俣尚己

1. はじめに

近年、言語学習においてコロケーションが重視されてきている。語の学習において大切なのは、語の意味を理解することではなく、語をどのように使うかという情報、すなわちコロケーションを理解することであると主張も行われてきている (Lewis (ed.) 2000、テイラー 2017)。一方で、コロケーションの習得は上級学習者であっても難しいという主張もある (劉 2017)。

いくらコロケーションの重要性が叫ばれても、コロケーションの幅を広げる学習活動として、リストの提示とその暗記以上の、何か面白い活動がなければ、さしたる効果は上げられないのではないか。そのような問題意識から、この論文ではコロケーションリストを元にした教材として、「コロケーションクイズ」を提案する。これはあらゆる言語素材に応用でき、知的な興奮を味わえる教材であり、それを使った活動も様々に考えることができる。

以下はこの論文の構成である。まず **2.** でコロケーションをめぐる先行研究について紹介する。**3.** ではコロケーションクイズとはどのようなものかを提示し、どのような新奇性を持っているのかを述べる。続いて、**4.** でコロケーションクイズの作り方を解説する。**5.** ではコロケーションクイズを使った活動について提案する。**6.** ではコロケーションクイズを作る上でこれまで直面した課題を挙げる。**7.** はまとめである。

第 12 章

国語科教育のための オノマトペの教材化

中石ゆうこ

1. はじめに

国籍を問わず、家庭において多言語環境で育つ児童・生徒、いわゆる「外国につながる子どもたち」(川上 2008) の数が近年、日本でも増加している。外国につながる子どもたちに対する教科指導の中で、国語科は指導が難しいといわれる(今澤・齋藤・池上 2005、田中 2015)。国語科は小学校就学前に話しことばの基礎をすでに身につけている母語話者を対象とした教育(今澤他 2005) という暗黙の前提がある。しかし、外国につながる子どもたちは、「話しことばの基礎をすでに身につけている」というスタートラインより前の位置から、しかも、十人十色のスタートラインから走り始める。このように多様な能力を持つ児童・生徒に対して、国語科をどのように指導することができるのだろうか。そこでこの論文は、オノマトペに焦点をあてて、日本語および国語科の指導で用いることができるように教材化を行う。

議論の流れとして、**2.**ではなぜ国語科、なぜオノマトペを焦点にして教材化したのかについて論じる。**3.**では小学校国語科におけるオノマトペの扱いをまとめる。**4.**では教材の概要を説明する。**5.**では教材作成の際に参考にしたコーパスと項目選定の方法を説明する。**6.**では作成された教材を用いた活動の事例とそこから見えたオノマトペ指導の問題点について述べる。**7.**ではこの研究のまとめをして、今後の課題を挙げる。

第 13 章

感動詞の教材化

小西 円

1. はじめに

この論文では感動詞を対象に扱う。感動詞にはさまざまな語が含まれるが、代表は話者の感情を1語で表すことができる「わっ」「へえ」「あれ?」のような語であろう。この論文ではこれを仮に感情感動詞と呼ぶことにする。ほかにも、「ええと」「あの」などの言いよどみ、「はい」「いいえ」などの応答、「おはよう」「こんにちは」などのあいさつも感動詞に含まれる(日本語記述文法研究会(編)2010)。また、感動詞は、「次の言葉が出るまでもう少し待つてほしい」「今、物の名前を思い出そうとしているところだ」というような心的な情報処理の過程が表現として現れたものであるとも言われている(定延・田窪1995、田窪・金水1997など)。つまり、感動詞は、それ一語で多様な感情や受け答え、心的な情報処理過程を表すことができる大変便利な語であるということができる。

感動詞は日本語教育においても初級から扱われる。応答詞、あいさつはもちろんのこと、言いよどみを表すフィラーや感情感動詞も頻繁にダイアログに登場する。次の例は、初級教科書の第1課に掲載されている初対面のあいさつ場面のダイアログである。自然な会話を成立させるために多様な感動詞(下線)が使われている。

(1) パク: こんにちは。

第 14 章

言語テスト作りを応用した 形容詞の教材化

渡部倫子

1. はじめに

この論文では、言語テスト作りの方法を応用することで、よりよい語彙教材を作る方法について提案する。

これまで、日本語教育の現場では、様々な語彙テストが作られ、実施されてきた。なぜなら、語彙テストの実施によって様々なメリットが考えられるからだ。よい語彙テストを実施すれば、

- (1) 成績をつけるためのデータの 1 つになる。
- (2) 学習者の語彙力がわかる。
- (3) 教師の語彙指導が適切だったかを確かめられる。
- (4) 語彙テストがあるよと言うと、学習者が頑張って語彙の勉強をする。
- (5) 語彙テストそのものが語彙の学習になる。
- (6) 語彙テストの結果を見て、学習者がよりよい方法で語彙の勉強を続けられる。

といった様々なよいこと（プラスの波及効果）が得られる。

ここで注目したいのは、(5)と(6)である。近年、言語評価の分野では、学習としての評価 (Assessment as Learning) が注目されている (Earl 2012)。学習としての評価とは、教師主導の従来の評価 (e.g. ペーパーテストの結果)、

第 15 章

多義語の教材化

麻生迪子

1. はじめに

語の習得は、語形と意味のマッチングから始まり、その後、語に関する様々な知識が徐々に習得されていく (Jiang 2002)。この論文が取り扱う多義語とは、1つの語形に対して複数の意味を持っている語のことであり (國廣 1982)、その習得は既に習得された語形と意味の組み合わせに新たな意味を加えていくものである。多義語の習得が困難であるということは多くの先行研究によって報告されている (松田 2000 など) が、その指導法については詳細に議論されていない。Imai (2012) では、多義語の基本的な意味は初級のテキストに登場するが、派生的な意味についてはテキストで明らかな指導がないと述べている。この論文では、**2.**で多義語教育の必要性を論じ、**3.**で多義語教育の方法論について検討する。続く**4.**では、自律的な多義語学習を促進させる知識について論じ、**5.**で教材案を提示する。最後の**6.**では、この論文のまとめと今後の課題について記述する。

2. なぜ多義語教育なのか

語彙知識が読む・書く・話す・聞くといった4技能において欠かすことができないのは、言うまでもない。例えば、読解を例にとり、語彙知識の重要性を説明すると、小森・三國・近藤 (2004) では、読解文の内容を理解す

第 16 章

語彙習得研究の成果を踏まえた震災関連語彙の教材化

小口悠紀子・畑佐由紀子

1. はじめに

「初めての地震でした。津波が見えた時、怖くて全然走れなかった。人生は終わりだ、さようならお母さん…と思いました。」(外国人被災者の感想)

1995年の阪神・淡路大震災では家屋の倒壊や火災による外国人犠牲者が170名以上にも及んだ。2011年の東日本大震災では、7万5千人を超える外国籍住民が突然「被災者」となり、津波の記憶や余震の恐怖を抱えながらの生活を強いられた。「高台」「避難」という日本語が理解できず逃げ遅れたケースや、震災後の生活において「給水」「配給」といった言葉の壁に、避難所を早々に退去したり、行くのを諦めたりした人もいた。

こうした問題を機に、減災のための「やさしいにほんご」の考案が進み、行政においても多言語表記の案内を準備するなどの対応が行われている。しかし、災害発生時から多言語での支援体制が整うとされるまでの72時間は、日本語能力が十分でない初・中級レベルの学習者が情報弱者として困難に陥る可能性が依然高い。そこで、この論文では防災学習と震災関連語彙学習を連携させ、初・中級学習者の語彙習得を支援するための「よみもの」を提案する。具体的には、学習者が読む活動を通して防災意識を高めつつ、震災関連語彙を付随的に学習できるよう、語彙習得研究や付随的語彙学習(incidental learning)の研究の知見を活かした多読用教材を作成する。